



Data

監督：石井岳龍
 脚本：宮藤官九郎
 原作：町田康『パンク侍、斬られて候』（角川文庫刊）
 出演：綾野剛／北川景子／染谷将太
 東出昌大／浅野忠信／永瀬正敏／村上淳／若葉竜也
 近藤公園／洪川清彦／國村隼／豊川悦司

■■■ショートコメント■■■

◆「原作：町田康×脚本：宮藤官九郎×監督：石井岳龍による宇宙的トライアングル」
 「日本映画界に新次元の風穴をぶち開ける、前代未開のエンタテイメント誕生！」
 「かつて誰も観たことのない超娯楽映画が誕生した。」

そんな過激な宣伝文句と個性的な衣装が目立つ、主演の綾野剛以下のオールスターの顔ぶれを見れば、こりゃ必見！そう思って劇場へ駆けつけたが・・・。

◆冒頭に登場するパンク侍こと掛十之進（綾野剛）の最初のセリフは侍風だったが、それはほんの一瞬だけ。その後は、すべての登場人物が侍言葉と現代言葉を同時に使う、いかにもクドカンこと宮藤官九郎の脚本らしい作り方だ。もちろん、それはそれでいい。また、黒和藩の藩主・黒和直仁（東出昌大）の側には、内藤帯刀（豊川悦司）率いる内藤派 vs 大浦主膳（國村隼）率いる大浦派の権力闘争があるという構図もしっかりしている。しかし、「腹ふり党」のイメージは、あまりにあまり・・・？

町田康の原作が「腹ふり党」の姿をどのように描いているかは知らないが、それをスクリーン上に表現するについて、石井岳龍監督はとんでもない演出をしたものだ。今の若者は、ホントにこれが面白いの・・・？

◆前半から中盤にかけては、それなりのストーリーがそれなりに興味深かったが、「腹ふり党」の元幹部・茶山半郎（浅野忠信）が登場し、クライマックスに向けて喋る大猿・大白延珍（永瀬正敏）が登場してくると、話はハチャメチャ。まさにカオスの世界に入っていく。中国第5世代の巨匠、チャン・イーモウ監督の『グレートウォール』（17年）が、クライマックスではかなりバカバカしい、城の攻防を巡るスペクタクルになった（『シネマ40』52頁）のに対し、本作は「関ヶ原の合戦」のような（？）大規模野戦のスペクタクルになるが、そのバカバカしさは全く同じ。それを、バカになって楽しめればいいのだが・・・。

◆本作は、「パンク侍」というタイトルと黒和藩における派閥対立がストーリーの軸だから登場人物は当然男ばかり。本作の紅一点は茶山の側についている美女・ろん（北川景子）だけだが、私にはその存在そのものに違和感がある。浅野忠信や染谷将太、永瀬正敏たちのアホバカに徹した演技はそれなりにお見事だが、さすがに天下の美女、北川景子に腹ふり踊りをさせるわけにはいかないから、彼女の踊りだけは少し上品で、それも違和感だが・・・。

しかして、この美女はストーリー展開上何のために登場させたの？そんな疑問がラストではなるほど、なるほどと説明されるが、これはちょっと無理筋では・・・？そんな本作を観ていると、クドカンの脚本の冴えもイマイチ・・・？

2018（平成30）年7月4日記